第二十一

哥と詞を若とをわ

[V.36]

PL788
.4
.G4
1654
vol. 36
copy 1
Asian
Japan
case

2004551302

深氏四十八歳の出より秋まで五葉誕生ノ事ヲ

黒髪のかん(柏)の恋ゝくのこなやこけらり語ことゝおとをを
こゝろで逢もかへりぬおとゞ(ね)小方(口恋)おぼしなげく
さ夜をこそ(柏ノ)まつるに志ゐてかけもなれなん命
かひなくつこをもかへべきことをしふこゝろハこゝろ
として又あれがちにこの世にもなれがたくおしこ
とゞめ夜ほしき男かハいもけなりし程より里
しふこゝろことにて河ぐすをもひとにハ今一ハ
まさんとおほやけけるくしのことにふれてかの
めなるぞしひのぼりしかどそのころかなひがた
かりかりとひとりふるのふしごとに男をおもひ
おとしてしこなるおべての世中すき夜じうしひ

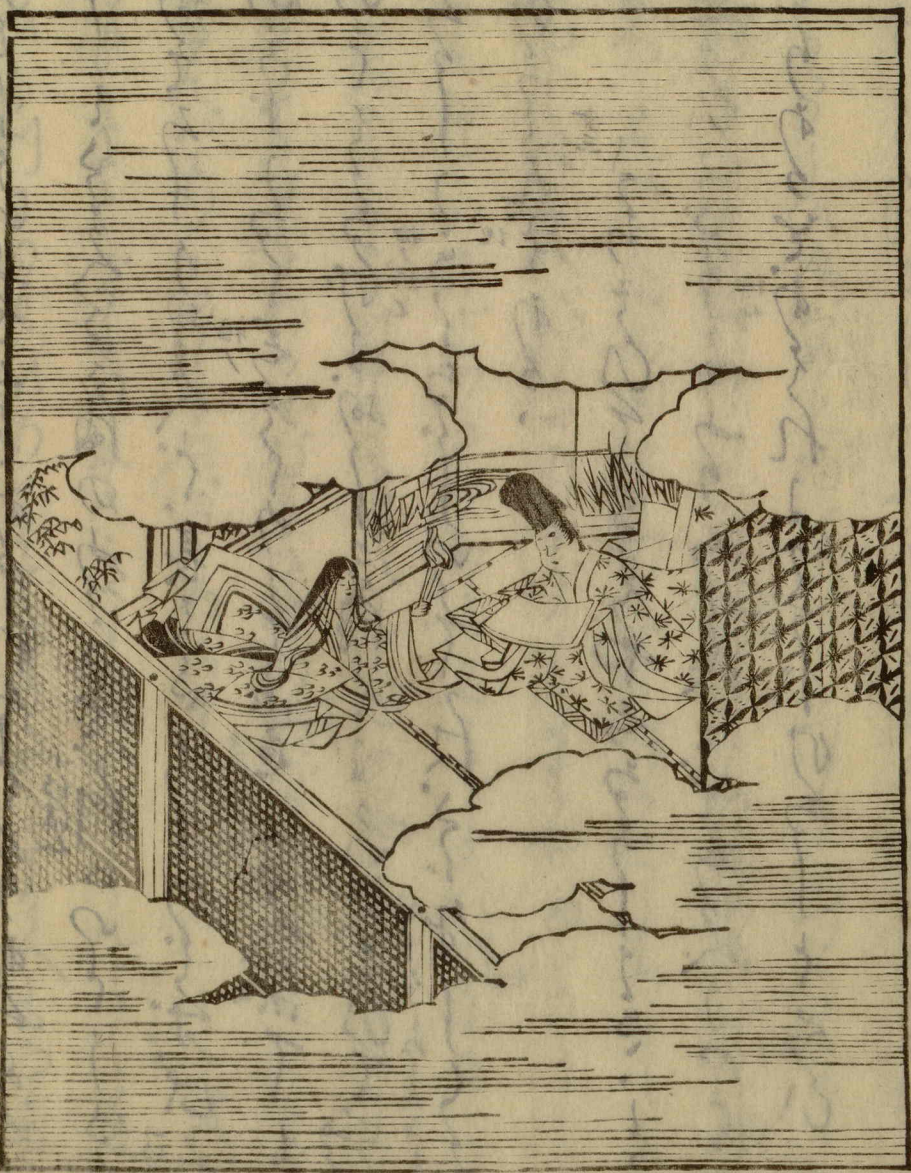
べき程にてなげの衣をもかけ給人あらんをこそは
川とつせにまもえぬるしまいきめきめてなげら
へばをのづからあるまじきなをもたち我も人も
やすらぬこゝれいでくるやうもあらんよりはな
めしと心をい給へらんあらりにもさりともなげし
ゆりてんりしよろ川のことゝ山田をのとぢめには
これきくぬべきまぎや又ことざ田のあやまちし
なければどしばもれなりふしごとにまつりしなしひ
給ましうるの衣も出きなんなどつれぐにおもひ
つゞくるもうちうへしいとゞあぢさなし など
うくほどもなくしるしつる力なんとうきくし

志得らんときこゝ給。(小侍従)(地)にもこりずまゝに衣数ゝ
ぞをいひ(拘ノ)をこせのへり。こゝげからもいま一たびいふ
べきことなどあるとのゝまへれば。(小侍従)ひとも。わらハ
より。さらたよりにまいりかよひ川こゝそまつり
なれたる人なれば。(ム)なほけなき心にそうたて覚て
のへれ。今ハときくハいとかなしうて。なくく(詞)なれ
この(ゝ)(ゝ)(ゝ)(ゝ)誠にこれをとぢめにもこそ侍れと男も
れば。(女三詞)これも久しふかすかれ心ちして。拘心ぼそ久れば。
なほ久の衣ぞりハなもひ志しられどいとこゝろ
うきことゝもひこりましかば。いとじうなんつ
ましきとて。さしまゝ給ひず。(地)(此)心のかぎのいとく

づしやかなるまはあしほどたづしげなる人(源)の御
りしきのおりくまほなるぬがいとおそろしう
まびしきなるべし(小侍従)されど御祝などまうなひて
をめ罪ゆれば(女三)しぶくまかいの紙(小侍従)とりて志のびて
よひのまぎれまかしこ(柏へ之)に来りぬ(以)おとゞもうしこ
きをこなひべかづらき山よりさうじ出たる。詩
うけのて(かぢ)加持(ぢ)来たるをんとし給(ミぞ)御(かうど)法(こきう)讀經なども。
いとおどろくしうさいざたり。人の中まゝり
さ後ぐひぢりぢけげんざなどのおきくよりも
きこしず(ふり)源さ山まこもりたるなどをもおとうと(柏ノ)
の志ぐちをいりしつゝぞ申めすまけまくく心

づきなきやまぶしどもなどもいとおほくまいり
柏ノ
まづしひ給ふ所のそこもうとなく、もれをうろが
そくしひてねをのことときぐいなき給ふ陰陽師
なども、おほくは女の具とのこうしなひとかれば、さう
ことまやとおほ（はノ）をどさしる地のけのあしかれいで
くるもなきに、おもほしまづしひて、かしかふ所ぐ
をもしづみしまふなりかり、このひだりもしけるか
やうに、まづし（目ノ下ニ）、いべぶましくて、おらうかり
おどろくしく、陸（だら）駐尾（ほ）よむといで（柏心）あかまくやつミ
のかきまやあしんぞしまの声ふうさは、いと
けおそろしくて、いよくしぬべくこそおぼゆれとて、

やをしまべり出て、この(小侍従)侍従とかたらひ給ふ。おとゞは
さも志り給はず。(柏ノ)うちやすこゝろとんぞ志て口さを
ゐへば、さ(ハノ)おぼして、悪びやうこのひぞりと抑給
し給。おとゞなびゐへれど、おぼしたるやぎこゝろとゝろ
つきて、抱けらひし給おとゞ(ハ)のかゝりもれどもと
むかひゐて、このけづらひそめ給しをさ夜、ゐまと
もなくうちこゝろ、をもりゐへること、夜ことなり
このもれくけあらいるべくゐんじこまへなど、こ夜
やうまかたらひ給も、いと衣なり。(柏河)かれ罪ゐへ、ゐまの
つゝとも、おぼしよらぬなり。うしなひよりかん女さん
まやうこそ、(まこと)誠まさる(女三ノ君ノ執ならばとゝ)れ志しの男をそひこゝろなるゝば



拍打 いづやこのうつりかはりそいバ世のさかひいでさるしあ。
しかるにもまけのかれど。地 いとゞなるきまよりなて八雲
かくなげしうちやすくつくいかふ玄の葉のつゞき
もなく。おやこの鳥の絵のやうにて
拍 かり来たる雲のうつりとなりぬるとをおもふ
あかりとうちいとあれど。夕(ゆふべ)はりきてなかさせ
なん。とゞめ(ほり)おきて。せ縁うれひとめとも。今ハ心やすく
おぼしぬそ。かひなき衣をもかなく縁(え)ぞけさきなん
などくとそうりて。心からのかなしさまさりそれバ。拍打 かし
いとう更ぬさいまにいりまいりつまいひて。うく限乃
さ夜よるんとも思ふなん今かつま人おやかへとさひ

あきをんなを。けが世の後さへせふこそくるしかれ。
いかなる音のちぎりにて。いとかうことしも心に
しらえけれと。なくしくねぎりいで給ぬれば。例(ふ給ひ)は
むごにむかへすへて。すぐろごとをさへいはせま
ほしうし給をことずくなるにてもとしふが衰なるに
えもいでやらず。此(地)ありさ夜をめれ(拍ノめれと)とをうたりて。
いうじう(なき)給まどふ。却(江)とじなどの気しかる気気ぞ
いうじきや。昨日そふすうしよろしかりつるを。など
かとよもげにはえし給とさいぶ給。(拍詞)なるにかな低
とまかり給るまじきなめりと罪しなて。さげかくも
かい給。(女三)(地)やはしられつるよりなやましうしなひ

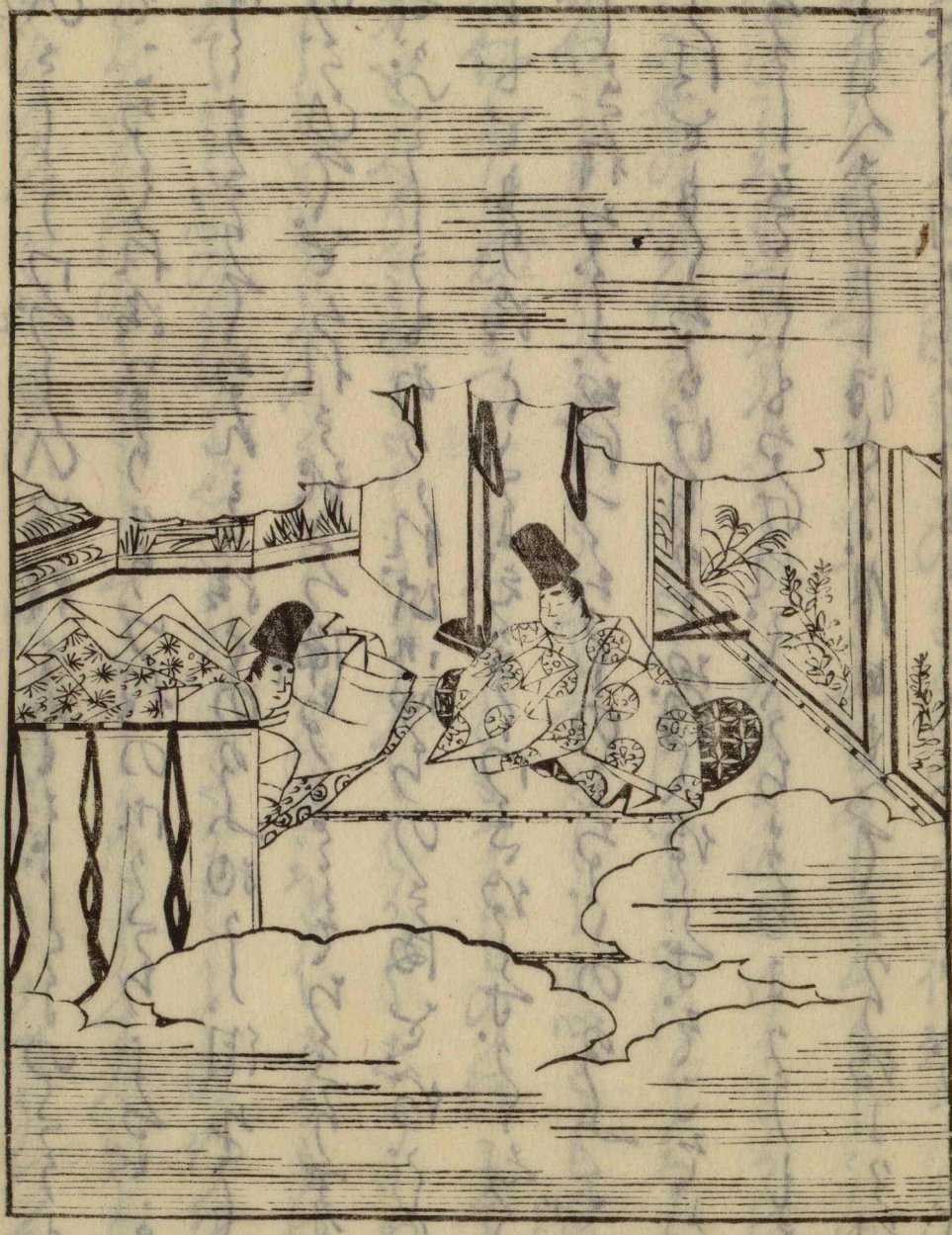
けるなそのはかしさとこなりしりうる人ぐさつぎ
こちて・おとゞにも宮しうられば・おどろきてけうり
のへり・はゞ心のうちには・おなくちなしや・おもひま
しうるなくてこなしましかば・先づしく
うれしうしましとおぼせど・人にハ気色もしさじと
おぼせば・ぞんざるどめし・こずほうもいひとなく
ふぐんにさしられば・もんぞうだのなるに・げんあな
うざりこれまつりてかぢまいりさしぐ・東ひと東
なやこあるさをのひて・日さしあがるほどにむまれ
のぬ・おとゞ君と・こさく給ふ・かくしのびうることの・
あやまくにいちぢるきかつきまて・さしいで

むつしげるおもすつなどとぞりつきてもそはり
給はずなどあれば。おひさしくなどいはでや 女三ノ人
とろくるもおりしますれ。先づしばし出給
へられよ。紙の。わざわざゆくさきまではおりしまず
とはりけらしをみあれば。女三 かくしはしみて。
さればこそいおぼけしくくづらことをまなしめと。
うしめしう銭をつくらそではおまも奴ちぞやの心
つきぬ。添ノ おうちなどもこおもるありへおけとのでもしず。
ひろつくろなぞぞさしのぞき給。詞 世中のもろかる紙
みつまにもり来しどりう抱心げそくて。そてかるひ
がちるは奴よて待れば。かたり待のらうがうしきし心ち

すゝまより。えまいりこぬを。いかゞれこゝちハ。さは
やうまさしぬまゝりや。心ぐるしうこそとて。れま
怯のそぞより。さしのぞきぬへり。れぐし(女三)もたげ給
ひて。れえ(訂)いきたりまじき心ちなんし侍候。かゝる
人ハつゝもをもうなり。何まゝなりて。もしそれまや
いきとまりと心ゑ。又なくなりとも。つゝをうしなふ
ことまもやとなんも侍りと。つゝのれけまひよりハ。
いとおとなびてきえて給を。いとうこそ(源訂)ゆゝしきれ
ことなり。などてかさまでハおぼまて。うしなことハ
さのゝこそおそろしかなれど。さてなりしへぬ日ぶ
ならばこそハあしめときえて給。れ心のうちにけ

し程よりも院のいと忘しく見し給を。まこもこ
ちらずなりぬるにやと。いろうちまさ給。かく四九し給
さ間。さるべき人をてつゝ養をさせ給かれど。いと
こゝがこうかなしとおぼして。あまじきことは
おぼしめしなぐら。我にかくれて出させ給。かねて
さるれをうそこもなくて。俄にかくつくりおもし
まいられば。あるじの院おどろきしてまり四九
給。世中をかへりしすまじうせ給しかどなをまどひ
さめがたき物は。この君のやうになんたぐりかれど。
をてなひもけざいして。もしをくれまきぐつ君の
道理のまゝなるでつれなばやがて此恨もやかる

よりさりつきてやんごとなう人よりもすぐれて
こなんと思し志候。この世にはかひなきやうに
なしなりもおかずなりしかれば。うち志はされなて。
詞 かくてもとひしかなて。おなじうはねんずをもつと
めなべきしきこしをきなて。明まてぬにいそぎ出
さをなぬ 安三ノ神 こやはなをよいうきくいりやうしなて。
もかぐしうもえこなしず。 某を 地などもきこし給ひず。
詞 おとゞも。 詞 夏のやうにしなへこゝろし心まどひて。
かう昔おぼしこゝろ由きのしこまりをも。えれ
らんぞられぬらうがいしさはゞとさしに氣り給て
なゞ事し給ひ。 送 をり に人ぞ氣しを給。 年詞 世中のはふかあを



侍らん。これかれあまたもれすれど。さ雨ぐなる事
ことまて。さしまかすめ侍らんもあひなしかし。六条
院まいさゝうなることれさがひめありて。月ごろ
心のうちまかし。こまりよことなん侍しを。いとほい
なう世中心ぼそうしなりて。やまひづきぬとおぼし
侍しまめしまして。院の御賀のがくそのころこれ日
来りて。御気色と給はりしに。我ゆるされぬれこそ
ぶんあるさ雨に。御まぢりをゝなり侍りて。いとゞよま
ながらへんこともまゞかりおぼうおぼしなり侍て。
けぢさなうしこまへしに。心のさばぎそめて。かく
おぼましぎなりぬるはなん。ひとかずにはおぼし

いれざりけめどいもけるう侍しときよりふうく
これミ中心の侍しといかるかざうぞんなどのあ
けるまうとこれなんこのよれうれへまて祈り侍る
べかれバろなうかれ後の世のさ後こげまもやとも
ぬふうとことのけいで侍しけれ見くとゞめてよ
ろしうあきらめ中させたまへなからんうしろ
まもけうじゆうされたらんなんけどくま侍る
べきなどの給まくまいと(タム)らすげまのミ見しまき
れバいらじうて心のうちまもひあつすうことゞも
あれどもさしてこしかまいえしもとしもうらず
(詞)いかなるれ心の鬼まかいさしまさやうなる(源)れ気気も

うくなん見ゆべき。なを衰とおぼせと罪しなへだ。
女三詞 りるさ海の人は。まれて衰もしらぬまれときこし
を。まして申とりしらぬことにて。いかゞも
きこゆべからんとのなへだ。源詞 かひなれことや。おぼし
柏ノ子 しるかるもわらん抱をとぢうりの給さして。蕓 ゆ
忍をこゝまりなふ。蕓ノ 仕めれとこちはやんごとなくめや
すき恨わまるさふふ。源ノ 絶しいでゝ。何かふまうる
べき心をきてなどの給。衰御りすくなき世なおひ
出べき人にこそとて。いづきさりなへば。蕓ノ いと心やすく
うちゑこそ。つぶくとこそ。しろうまつらし。夕 大物
源ノ などのれちぞおひ。ほのうなおぼし出るまゝ。此給

安（十三ム）もさしも常しけず。人もさしまさしぬことなれば。さぞ一（添ム）さらの心のうちにのこぞ。哀もかかりけり人の歎かるとこゝ給ふ。大かたの世れさぞのあきも。おぼしつゞけられて。涙のほろ〳〵とこぼれぬるを。なふいことゝいとすべき日とゝ。としのぐひくしあて。おげかるさてなげくまへうとうちずじ給。又十八とゝとさりすてゝうれらひなれど。東に如ぬる心ちもぬひて。いと抱哀におぼさる。なんだ（比）うちにともいさめまほしうおぼしかへし。このことの心（添ム 拍ノ密通ノ事）もわり人め房の中にもあらんかし。おしぬこそねたけれ。おこなりとこゝろんとやすらぎおぼ

をばいつゞ給やうら人を持て、そむきもてなぬ
べき世にやありけり、おれ心うとなどろうしきて
なんぞ、女三 かゝうちあめてなりす
源 ぞ世にうれいまきしと人とはぐいつゞ岩
ねのねいこゝん、衰ありなど悪びてきこし給ま、女三 れ
いく人もなりて、ひれかしなんり、源ん こともなとなば
をば、志ねてもきこし給ず、女三ノ いつまなばすらん、もれ
かうなどいなりせねど、いつでかは、柏ノ ぞ こはとを
しもうきこし給も、いと心ぐるしうなん、大夫ん 乃
言い、柏 後心にあまりて、はのめしまうしを、いう
なることにかありけん、すこしもれなばしうるさ夜

ゐらましかば、さぞうらうらおそめたりしまいと
よう氣色をみてましをいふかひなきとぢめにて、
ありあしう、いづせうあそれまもありしかれと、
おもかげ忘がたくて、ちらしの志遊よりも、志ゐて
かなしと見しのひかり、女三宮のかく世をそむきのへる
ありさ夜、おどろくしきなやみにもあらで、すら
やかにそしたちけるほどに、まるさうとゆるし
天しのべきことかは、二条のうへ(紫)のさばかり限にて、
なくく口給ときしを、いとじきことにおぼ
して、つねにくかけとじめなりのへるものをなど、
とりあつめて忘らざくに、れ音(柏ノ子)ようそぎゆゑ

なり。さるはかくことをなんりすめしと申出て、此乳色もこま
明しかりなり。父(フス)おとゞ母小方(住吉)は、洞のいと面なく、笑しもぶ
こて、もちなくすぐる日数(ぶ)をもしり給ひず。此(伯)ぐれ明う
ぶく。此さうぞくなまくれのいそぎをも、見遣れかる
がさとりぐまなんをさせ給けり。経佛のなきさて
なども。左大弁(後江梅忠太臣)の君をさせ給。七日くのれずきやう
まども。人の罪しおどろかすまも。これ(訪詞)まなきさせそ。
くいそじとせひまどふま。中くなき面なげ
まもこそとて。なきやうまおぼし明れたり。一条の(家嗣)
まは。まして御つるくて。見れ給ひし根さん
そへて。日ぐかりまして。ひろき家のうち。人げすく

をふ事してこゝにとまりぬる人ありおもれ（柏）最愛の
れけるひとゝそうちわすれてはこつれとてなくも
あり（タ）ちね愛のおりしゝるなりけり此せうそこ四の
いれぬへり例の弁の志（柏ノ弟後ニ紅梅太夫ト云 故宰相之柏ノ弟）宰相などのおりしゝると
おぼしつゝをいとゝもづしげにきよらなるれもて
しまていりぬへり もやのひさしにおましよそ
ひていれなり としなべゝるやうに人ぞのあへ志しひ
きそしんはうゝじけるさき後のしぬへれど此息（後ノ最愛ノ母）
所ぞこゝめしぬへるいうじ（タ詞）ゝとゝをこぬへるげく
こゝろはさるべき人ぞにもこえてもべれと恨あれば
きそしさをやうゝなるてよれつゝになり給りす

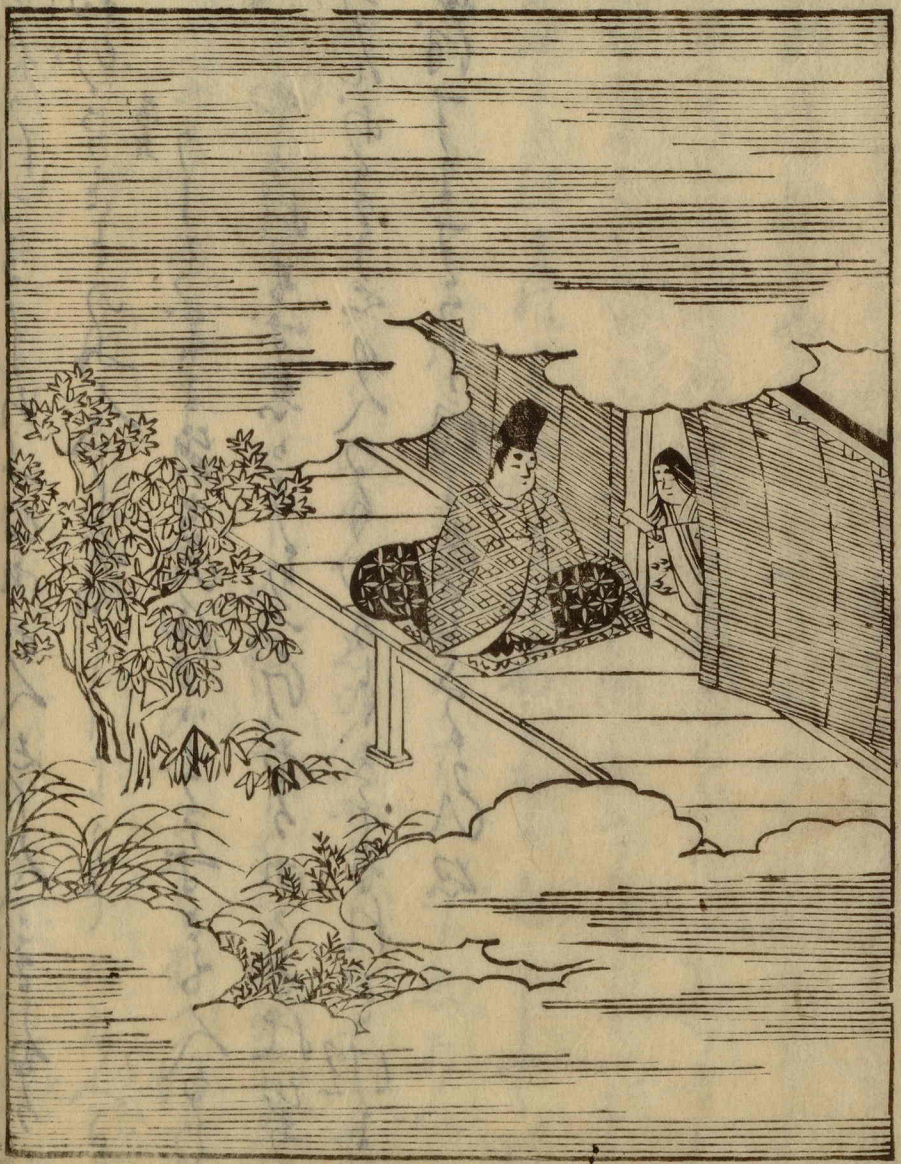
げるかれ（宿衣ノ）おぼしなげくらん此心のうちのくらし
けるけれど、いと心ぐるしうも侍かれなど、なつかしう
こまやかに罪しなて、やく狩へてぞ出なふ、かれ（地）恵（柏）え
女六年のほどれこのうこなりしかど、なほいとまう
やうなる夜のきあいぐれて地しなひし、これも（夕つかす）
いとすくよかるをもくしくおくしきけもひして、
かれのうこぞいとまうきよりなること、人にすぐれ
なへる、つかき人（宿衣ノ共ズイ）ぐい地がなしさもすこしまぎれて、
こいぐしまかれ前ちかき様のいとおもしろき紙、
（夕ん）ことしぢういとうちおぼゆるもいぬくしき
すぢなりかれいおひえんこといとくちずきひて

夕
時しあればかはらぬ色ににほひけりかたえ
かれにしやどの桜も。わざとならずずして
立給ふに。落葉宮母いとゝう
御息所この春は柳のめにぞ玉はぬくさきちる
花のゆくゑしらねばと聞え給ふ。いとふかき
よしにはあらねど。いまめかしう。かどありとはいはれ
落葉宮ノ母ノ事給ひし更衣なりけり。げにめやすき程の用意なめりと
見給ふ。ちじの大殿にやがて参り給へれば。君達あまた
ものし給ひけり。こなたにいらせ給へとあれば。
大との御出居の方に入給へり。ためらひて
対面し給へり。かはらぬ御かたちいときよげなれど

なへば（以詞）めも　えしぎやとをしきほりつゝ給。うちひ
そこつゝ給はさ海れいもころづかうあざやかに。
ほうりかなりはかしきなどりなく人まろし。うゐ
ことなることなかれど。此玉をぬくとあるかしの。
げよとおぼさるゝに心えぐれて。ひさしうえこめ
らひ給ひず。（夕）君のはもて（菱）君のかくれなへりし私なん。
よまかなしきことのきはにはおぼし給しを。如は恨
ありてこゝ人すくなう。とあることもかゝることも。
あしはなくねばかなしひもかくろへてなんありけり。
（拍ノ字）ちらぐしかくれど。おほやけもすてこ海ならず。
やかく人となり。つゝさ位につけて。おひこれむ

（夕）なき人もおもはざりけんうちすてゝ夕のかすみ（中宮に）
君きたれとは。（後ニ紅梅右大臣）弁の君
（紅梅右大臣）うらめしや霞の衣たれきよと春よりさきに花の
散けん。（地）れはざるずられつるあらずいりあしらあん
ましけり。（夕）大殿の少将を（雲井）ばさる抱まで、（夕の弟之）とれむしろあ
えさまず。縁あれども哀まゞうきさ心だへをさらん給。
それ一条の宮（落葉）にもつねにとぶらひきこえ給。卯月
ばかりの空はそこはかとなう心ちよげに、ひとつ色
なる四方の梢もおかしうみえわたるを、ものおもふ宿
はよろづのことにつけて、しづかに心ぼそく、くら
しかね給に、（夕落葉へ）例のわたりたまへり。庭もやうやう

おましなりとて、れいの此息(彦兼ノ母)所おどろかしたてゝ
れど、此ごろなやましとてよりかしゐへり、とかく
こゝろくまぎしいす程、おまへのうぶちどもちかと
なげなる気色をしめふもいと(ん)抽衣なりかしいまと
かへでとれ、もれよりけまけやかなる色して、枝
さしかたしたるをいかなる(河)祭りてりかすゑあへる
これもしさよなどのなて、志のびやかさしよりて
ごとなしばなしの枝になしさるん葉(えり)なの
神のゆるしありたとこゝ寺のとのへぞてあるほど
こそうしめしかれとてなげしまよりぬゐへり。
なよびすぐるさゝいとつたうしをやぎけるとやと



ねばいつう心とゞめて。此者さ海もとひきて給はり。
かたちぞいとまほにいえもれし給まじかれど。
いとこゝろしうかたけしいつき程まゞうにあらずし。
などてこゝろめにより人をもおもひあき。又さうまじ
きる心をもまどいすべきぞさ海あしや。こゝ心ぞちを
のこゝそいひもてゆんにいやんごとなるべけ
れとおぼせ。今ハ程昔におもほしなずしへて。うと
うしずもてなきせ人など。けぎとけさうびてい
あらねど。ねんごろに気色ごとてきて給。なをし
すぐさいとあぎやかまて。こけぞちもれくしう。
そゞろかまぞこゝ給けり。彼おとゞハよろぶのこと

69038
6AP78